

M 氏邸訪問記(2014.6.14)

1. はじめに

M 氏は単なるオーディオマニアというよりは幅広い音楽愛好家と言った方がよい、クラシック音楽に造詣の深い方で昨年 12 月に拙宅にお越しになりました。今回は A 氏とともにご招待にあずかり、M 氏が丹念に調整を繰り返してこられてきたシステムを聴かせていただくことになりました。

2. M 氏邸のシステムの概要

聴かせていただいたスピーカーは、オールフォステクスのユニットで構成した 5 スピーカー 4 ウェイの自作スピーカーです。ダブルウーファーは、アキュフェーズの F25 で -18dB で切ってマランツのプリメインアンプの PM-14SA で駆動し、スクーカー以上はアキュフェーズの M6000 で駆動して、-6dB クロスの自作ネットワークで帯域を分けています。デジタルプレイヤーは、マランツの SA7-S1 と最近導入されたオッポの BDP-105JP を使用され、アナログプレイヤーは SONY の TTS-8000 に FR64FX を組み合わせ、ベンツマイクロのカートリッジを使用されていました。SA7-S1 には GPS-777 からクロックを入れておられます。他にも、テクニクスの SP-10III とイケダのアーム、オルトフォンのモノカートリッジのものなど、アナログのラインアップは充実しています。フォノイコはアキュフェーズの C-27、プリはアキュフェーズの SC7S2 といった構成ですが、後ろの棚には過去の財産が数多く控えています。その一例としては、現在は鳴らしていない、パイオニアの 38cm ウーファー、ONKYO のホーン、テクニクスのツイーターを組み合わせた、巨大な自作キャビネット入りのマルチアンプシステムもあり、まさに筋金入りのマニアといった感じです。

また、最近導入され、結線のみ行ったばかりの TASCAM DA-3000 もあって、アナログの名盤を DSD 録音を行う準備が整っていました。



左：フォステクスユニット自作スピーカー
右手前：M-6000



上段：C-27
下段：SA7-S1 その上に DA-3000



TTS-8000, FR64FX, ベンツマイクロ
積層合板の自作キャビネットマウント

3. 試聴の経過

M 氏の凄いところは、システムのキャリアだけでなく、古今の名盤に通じておられ、録音やプレスがとめどなく、さらりと語られてくることです。そういった中から、アナログと CD をいくつか聴かせていただきましたが、要約すると次のようになります。

①音に滲みがなく、演奏者の意図が手に取るように分かる、②録音やプレスの違いが良く分かる、③楽器のメーカーや機種の違いが良く分かる、といったところでしょうか。一例としてクナパーブッシュの全盛期のウーンフィルの迫力、エラールやブリュートナーなどのピアノの音色が説得力を持って聴くことができ、スタンウェイがあたかも電気ピアノのように聴こえてしまう昨今のハイエンドとは大きく趣が違います。

聴かせていただいた中では、オッポがマランツのプレイヤーよりバランスが良く、ア

ナログは、楽器の質感はもとより個々に焦点があった 3 次元の音場が広がっていました。

4. まとめ

ネットワークやマルチアンプの調整のプロセス、自作スピーカーの各ユニットの位相を揃える位置合わせやユニット背面への慣性質量の付与と各ユニット間のメカニカルな固定方法、カートリッジやアームの構造を知り尽くした選択経過など、ハードの調整の蘊蓄をお聞きしましたが、こういった肌理細かい調整が音の滲みがないことに繋がっていることは容易に想像できます。このようなオーソドックスな攻め方は昨今のオーディオでは忘れられているのではないかと思われま

す。さらに、録音やマスタリングやプレスを選別など、ソフトの背景など話は尽きることはありませんでした。また、録音の現場や演奏を知らないエンジニアの安易なリマスタリングや評論家の推奨記事、歴史のある楽器メーカーの衰退、テクニックだけに走り大向こうの喝采を期待する昨今の演奏スタイルが多いことなど、傾聴すべき卓見には感服しました。

最近話題の有山麻衣子の新旧の盤についてブリュートナーの共鳴弦の聴こえ方の違いについては意見が一致し、意を強くしました。

次回はアナログ名盤の GPS クロックを入力しての DA-3000 による DSD 録音の成果を聴かせていただきたいと思います。

以上